

【暗証聖句】「信仰によって、アブラハムは、自分が財産として受け継ぐことになる土地に出て行くように召し出されると、これに服従し、行き先も知らずに出発したのです。」ヘブライ人への手紙 11 章 8 節

【日・アブラハムの旅立ち】

創世記 12 章 1、2 節「主はアブラムに言われた。「あなたは生まれ故郷、父の家を離れてわたしが示す地に行きなさい。わたしはあなたを大いなる国民にし、あなたを祝福し、あなたの名を高める。祝福の源となるように」

主はアブラハムに「生まれ故郷、父の家を離れてわたしが示す地に行きなさい」と言われます。それはアブラハムを大いなる国民とし、祝福の源とするためでした。主は 7 回も「行きなさい」と言われています。主は示された地に行くためには、家族、親族、友人たちと別れを告げ、生まれ故郷を離れなければなりません。また、どこへ向かうか、生活がどうなるのかもわからない、それはまさに信仰の旅立ちでした。「行きなさい」というヘブライ語「レーフ、レハー」は、「自分自身のために、自ら行きなさい」というのが直訳です。つまり、神様のご命令に対して、自分自身で決断して出ていかなければならなかったということ、そしてそれは自分を捨てるということでもあったのです。ところで、アブラハムが住んでいた場所は、ウルという名のバビロンの都市の一つでした。そのことから霊的な教訓として、信仰の歩みを始めるというのは、古いものを捨て、バビロンを出るという聖書の基本的なメッセージとも重なってきます。

「バビロンを出よ、カルデアを逃げ去るがよい。喜びの声をもって告げ知らせ。地の果てまで響かせ、届かせよ。主は僕ヤコブを贖われた、と言え。」イザヤ書 48 章 20 節
「わたしはまた、天から別の声がこう言うのを聞いた。「わたしの民よ、彼女（バビロン）から離れ去れ。その罪に加わったり、その災いに巻き込まれたりしないようにせよ」ヨハネの黙示録 18 章 4 節

また、主が示される「地」に行きなさいという命令を、アブラハムはイサクを捧げる場面で再び聞くこととなります。

創世記 22 章 2 節「神は命じられた。「あなたの息子、あなたの愛する独り子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。わたしが命じる山の一つに登り、彼を焼き尽くす献げ物としてささげなさい。」

モリヤの地では、イサクではなく、イエス様を表す小羊がイサクの代わりに捧げられることとなります。つまり、主はアブラハムに、救い主によって人類は祝福に入ることを教えられたのであります。こうして、アブラハムがバビロンを出て主が示される地に向かう物語は、最終的に救い主と出会い、全人類の救いを示すものとなっていくのです。

【月・エジプトの誘惑】

カナンの地に入り、さらに旅を続けてネゲブ地方に移ったとき、飢饉が起こります。そのため神様が約束された土地を離れ、エジプトに向かいます。

創世記 12 章 10 節「その地方に飢饉があった。アブラムは、その地方の飢饉がひどかったので、エジプトに下り、そこに滞在することにした。」

カナン地方に飢饉が起こると、カナン人は度々エジプトに行ったことは、エジプトの古文書に記録されています。その中には、カナン人たちは「哀れな乱暴者」と呼ばれ、「みすばらしく、水がなく、1 か所に定住せず、食料のためならどこへでも行く」と書かれてあるようです。アブラハムも多くのカナン人たちの行動をまねたのか、あるいはアドバイスされたのかもしれませんが、ただ問題なのは、ウルを出た時とは異なり、神様からエジプトへ行くように示されたわけではありませんでした。自分の考えや経験に基づいての行動でした。この自分の考えに頼っての行動は、妻サラを妹だと嘘をつく姿の中に顕著に表されています。

創世記 12 章 11～13 節「エジプトに入ろうとしたとき、妻サライに言った。「あなたが美しいのを、わたしはよく知っている。エジプト人があなたを見たら、『この女はあの男の妻だ』と言って、わたしを殺し、あなたを生かしておくにちがいない。どうか、わたしの妹だ、と言ってください。そうすれば、わたしはあなたのゆえに幸いになり、あなたのお陰で命も助かるだろう。」

これらの行動は、アブラハムの信仰がまだ未熟であったことを示しています。人類のあけぼの上 P128, 129 に次のように解説されています。

「アブラハムはエジプトに滞在していた間に、彼がまだ人間的に弱く、不完全であるという証拠を表した。彼はサラが妻であることを隠して、神の守護に対する不信を示し、これまで彼の生涯において何度となく立派に示されたあの偉大な信仰と勇気を欠いたのである」

私たちは、ここに偉大な神の人でも過ちを犯し、不信仰になるのを見ます。しかし、それでもなお神様は人をお

見捨てにならないのです。アブラハムはしばしば信仰の父とみなされますが、アブラハムとて主の憐みとお恵みによって救われていく姿を見るのです。

【火・アブラムとロト】

エジプトでの苦い経験の後、ベテルまで戻ってきます。しかし、土地が十分ではなかったために、「アブラムの家畜を飼う者たちと、ロトの家畜を飼う者たちとの間に争いが起き」ました。そこで分かれて住むことになったのですが、その際にアブラハムはロトにまず土地を選ばせるのです。

創世記 13 章 8、9 節「アブラムはロトに言った。「わたしたちは親類どうしだ。わたしとあなたの間ではもちろん、お互いの羊飼いの間でも争うのはやめよう。あなたの前には幾らでも土地があるのだから、ここで別れようではないか。あなたが左に行くなら、わたしは右に行こう。あなたが右に行くなら、わたしは左に行こう。」

この寛容さは、アブラハムがどんな人かを良く表しています。ロトは言われるままに目を上げて眺めると、ヨルダン川流域の低地一帯が、主の園のように見渡すかぎりよく潤っていたので、ヨルダン川流域の低地一帯を選びました。それに対してアブラハムは、ロトのように自分で決めるのではなく、エジプトでの苦い経験から、主に委ねるのです。

創世記 13 章 14、15 節「主は、ロトが別れて行った後、アブラムに言われた。「さあ、目を上げて、あなたがいる場所から東西南北を見渡しなさい。見えるかぎりの土地をすべて、わたしは永久にあなたとあなたの子孫に与える。」

ここが両者の大きな違いであり、後に起こる悲劇を回避できるかどうかの分かれ目でした。ロトも、自分で主に祈るかあるいは、アブラハムに主の導きを求めるべきでした。

【水・バベル同盟】

創世記 14 章に、聖書の中に記録されている最初の戦いが書かれてあります。メソポタミアとペルシアにある 4 つの軍事同盟国と、ソドムとゴモラを含むカナン の 5 つの国の軍事同盟国との大規模な戦いでした。この戦いは、カナン人がバビロンの封建的な支配に対して謀反を起こしたことによるものでしたが、重要なことは、これがアブラハムが約束の地を神様から与えられた直後に起こったということです。神様から導かれて進んできたのにこのような大きな戦いが起こり、アブラハムの平和と安全が脅かされそうになったのでした。私たちも神様の御心を信じて歩んできたのに大きな困難に直面すると、「なぜ？」という気持ちになるものです。しかし神様は、それでもなお、わたしを信じるかと問われるのです。アブラハムにとって、これは信仰の戦いでもあったことでしょう。当初、アブラハムはこの戦いから距離を置き、平和に暮らしていましたが、ロトが戦いに巻き込まれ、捕らえられてしまったことから状況が一変します。アブラハムはすぐに、「彼の家で生まれた奴隷で、訓練を受けた者三百十八人を召集し、ロトを救出に向かい、見事に敵を打ち破ったのでした。戦いなどとは縁遠いイメージのあるアブラハムですが、驚くべき勇気と実行力です。人類のあけぼの上 P65 に「アブラハムはまず神の序言を求めた」とあります。ここが一番重要な点です。アブラハムは信仰によって戦ったのです。アブラハムの勝利は、カナンの人々にとって、アブラハムが信じる創造主なる神は生きておられるという力強い証となっていたのでした。

【木・メルキゼデクの什一】

創世記 14 章 18～20 節「いと高き神の祭司であったサレムの王メルキゼデクも、パンとぶどう酒を持って来た。彼はアブラムを祝福して言った。「天地の造り主、いと高き神にアブラムは祝福されますように。敵をあなたの手へ渡されたいと高き神がたたえられますように。」アブラムはすべての物の十分の一を彼に贈った。」

「いと高き神の祭司」であり、また「サレム（エルサレム）の王」であったメルキゼデクが、パンとぶどう酒を持ってアブラムを祝福しにやってきます。イスラエル以前の古いカナンの都市国家エルサレムに王が存在していたことが分かります。また王が祭司を兼ねていたことは、当時珍しいことではありませんでした。メルキゼデクは「天地の造り主、いと高き神にアブラムは祝福されますように」と言っており、アブラハムと同じ創造主なる神を信じていたことがわかります。アブラハムは彼にすべての物の十分の一を贈ります。什一の制度が制定される前でしたが、これはメルキゼデクを祭司として認めていたがゆえであり、無事にロトを救出することができたアブラハムの感謝の気持ちが現れています。なお、メルキゼデク自身についてはあまり詳しいことが分かっておらず、イエス・キリストを意味するわけでもないのですが、エルサレムからやってきた祭司であったことから、やがてエルサレムが礼拝の中心となることが預言的に啓示されていると考えられます。